

広島大学総合科学部報

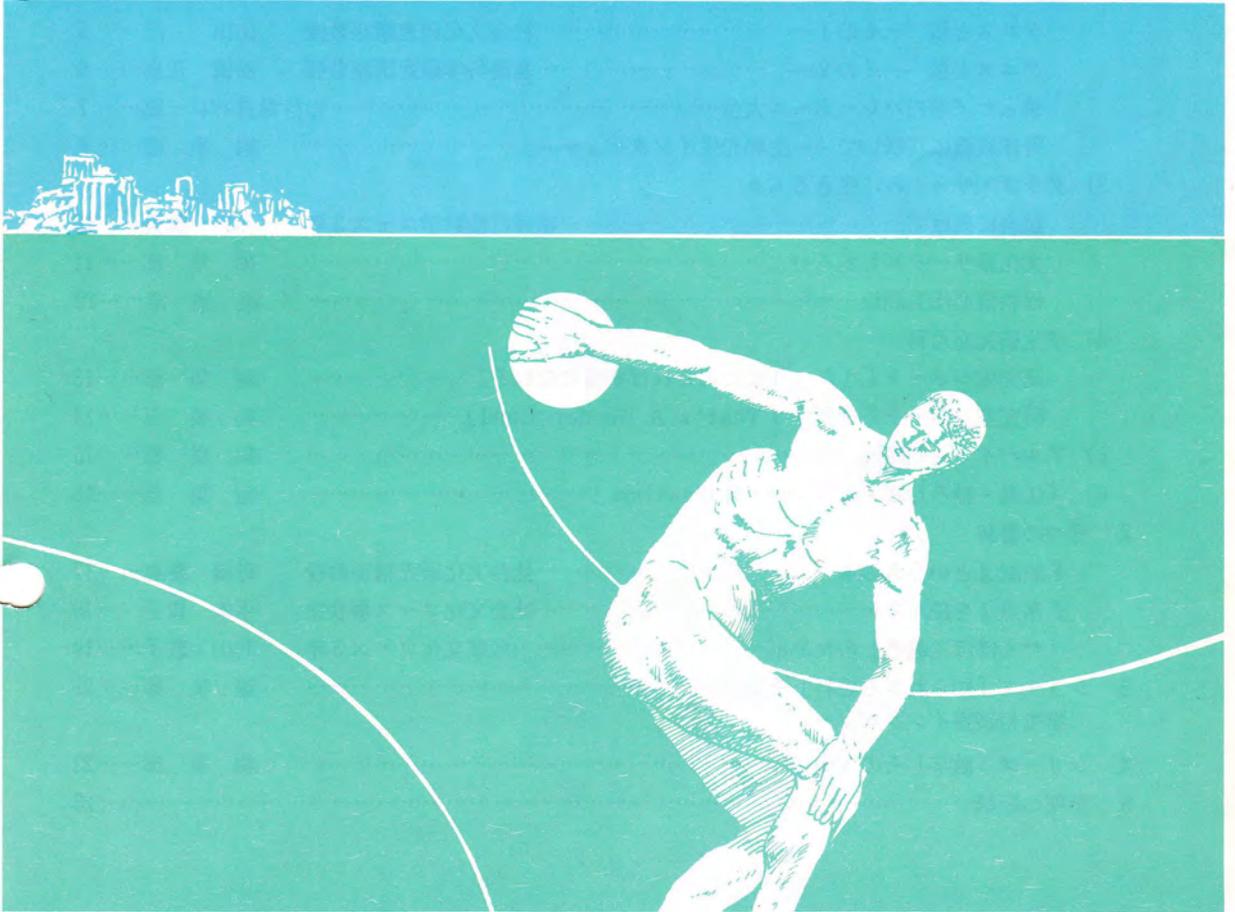


ひ

しょう

1985年11月20日

No. 29



特集：わくわく総科ランド

広島大学総合科学部広報委員会

目 次

1. 特集 わくわく総科ランド	編集部		
1) 月曜日が待ち遠しい! —コース別生活紹介—			
果たして社文は楽か? (社会文化コース)	社会文化コース4年	山田 康博	1
実験 — のどもと過ぎれば 熟さを忘れる(環境科学コース)	環境科学コース3年	美濃輪智朗	2
語学はお友だち (地域文化コース)	地域文化コース3年	野田 啓三	3
総科のバイオマンたち(情報行動科学コース)		編集部	4
2) 強者どもは『夢の途中』			
テニスと私 — その1 —	社会文化研究講座教授	山田 浩	5
テニスと私 — その2 —	基礎科学研究講座教授	松田 正典	6
勝った!学内バレーボール大会		総科職員バレー部	7
野球談義に花咲いて — 生和先生インタビュー —		編集部	8
3) クラブ・サークルに生きる人々			
試合に向けて	情報行動科学コース3年	赤川 雅美	10
文化系サークルもあるぜよ		編集部	11
総科倶楽部見聞録		編集部	12
4) 学生研究室百科			
研究室レポート(1年)「ここにくれば幸福になれる」		編集部	13
研究室レポート(3年)「That's A Wonder Land」		編集部	14
5) アルバイト百花繚乱		編集部	15
6) 「広島・ひろしま・ヒロシマ・Hiroshima」		編集部	16
2. 三つの書評			
『誤訳』という名の本	社会文化研究講座教授	舟橋 喜恵	17
『氷点』を読んで	社会文化コース事務室	平本 貴子	18
「たんぼぼ主義者」のために	地域文化コース3年	向山 敦子	19
3. シリーズ「知られざる総科」その2		編集部	21
学生相談室インタビュー			
4. シリーズ「数字」その5		編集部	22
5. 学部の記録			23

1. 特集 わくわく総科ランド

編集部

大学がレジャーランド化しているかどうかはともかくとして、学生のみならず大学関係者にとって、大学がただ講義をしたり受けたりするだけの場所ではなくなってきたのは確かだと思います。大学とは何なのか。学問の場、と一言で片付けてしまえばそれまでですが、視点を変えて大学生活（大学生生活ではありません）とは何か、を問うてみると、そこには大学にいる人人のさまざまな姿が見えてくるのではないのでしょうか。そこで今回の特集では、総合科学部の教官、事務官、学生が大学でお仕事の他にどのような生活を送っているのか？というテーマを追求してみました。そこから総合科学部の今までとは違った面が見えてくれば、と思います。

1) 月曜日が待ち遠しい！

—コース別生活紹介—

果して社文は楽か？

社会文化コース4年 山田 康博

社会文化コースの学生になってから2年半が過ぎました。にもかかわらず（あるいは、であるがゆえに）、「社会文化の生活」について何か書く段になると、やはりウーンとうなってしまうことになりました。学生は多様ですし、学生以外の人のことは闇の中です。あえて社会文化の生活をえがくわけですが、それがどこまで普遍性、妥当性をもつかについては、したがって明らかではありません。あくまでも主観の域にとどまるものであるのは、やむをえないことでありましょう。

新しく建てられたばかりの広島市役所のビルディングを背景とする形でテニスコートを一面に見渡すことのできるプレハブ棟があります。社会文化の学生が集う部屋があるのは、そのプレハブ棟の2階なのです。

その歩くたびに上下に揺れる、いまにもぬけてしまいそうな床をもった部屋を、学生たちの声が5月の太陽のように明るく照らすのは昼休みの頃です。中には、目覚めてテレビのスイッチを入れるとタモリの「笑っていいとも」がはじまっていた、とか、あの「滞つくし」と共に起きた（もちろん、8時15分からのそれではありません、念のため）と快活に語る「重役出勤」組もないわけではありません。

ところで、重役出勤のような日々の出来事は、社会文化の生活のいわば全体的な枠組とは無縁ではありえないでしょう。大学生活を仮に4年間としてみて、その4年間の社会文化の生活の枠組はどのようなものでしょうか。

社会文化コースでは3年次からゼミを履習することになっています。それに先だって、1年次には社

会文化ゼミナールを履習したり、2年次にはもっぱら講義をとります。1年次と2年次の経験からゼミを選択するわけです。3年次ではゼミに大きな力点が置かれ、4年次の特別研究へとつながっていきます。4年生になるまでに単位をほとんどとってしまい、4年次には特別研究や就職活動に力を注ぐことが可能となるようにしてしまいます。異論はありましようが、オーソドックスな社会文化の生活の枠組はこのようなものであるといってもいいのではないのでしょうか。

「立てばパチンコ、座ればマージャン」との悪名が高いのは某大学の経済学部生だそうです。でも、どうやら一般的にいて社会科学系の学部・学科では、講義のあるなしとかかわりの切れたところで学生生活が成立するような状況があるのかもしれない。仮にあるとすれば、それもまた社会文化の生活の枠組のひとつとなります。

ところで、枠組が一般的に成立するとしても、あくまで枠組であって、その中で動めく学生は実に多彩です。

ここに『社会文化会報 vol. 5』（1983年3月刊）があります。その中に社会文化学生68名のアンケート調査結果が載せられています。それによると、収入、アルバイトからはじまって、生活時間、愛読書（誌・紙）、恋人の有無、就職観、政治意識にいたるまで、学生の多様性がわかってきます。

共通の大きな枠組の中での学生の多様な生き方というのが、社会文化の生活のいわば基本的な構図であるといってもよいのではないのでしょうか。

実験——のどもと過ぎれば熱さを忘れる

環境科学コース3年 美濃輪智朗

総合科学部という所はどこのコースだろうが、講義に関しては自分の好きな分野を受けていい。それで環境科学コースの特徴をよく表しているのは実験であろう。2年生の時は一般科学実験があり、3年生になると環境科学実験があり、4年生では卒論の実験がある。

ともかく実験とレポートがひたすらあり、夏休みになってほっとする暇もなく、いまだレポートを3つもかかえている、といった所が現状ではある。しかし、実験がそんなに厳しいものかというところでもない。本気で取り組むといくら時間があっても足りないが、手を抜こうと思えばいくらでも手を抜けるからだ。その時の時間の状態と自分のやる気の大きさで、ある程度の作品が出来上がる。一晩でレポートを2つ書いたことがあるが、出来のほうはひどいものであった。しかし、これでも提出したら点ももらえた。

実験はレポートばかりではなく、ほかの特徴も持っている。それは環境科学コースの教官が総出で指導することである。講義では会えないような教官を知る機会になるし、講義の時とは違った側面をちらっと見せてくれることもある。何といても環境科学コースは教官の数が多し。学部生が88人で教官が65人である。約4:3。教官65人のうち何人知っているか？実験はこんなに大勢いっしょの教官がどんな研究をしているか知る機会でもある。環境科学実験の機器分析実験の最後の日には研究室めぐりを行ったが、これは上のような意味ですばらしいことだと思う。この後の実験の打ち上げもよかった。教官が多いせいも、ともすれば教官と学生と疎遠になってしまう傾向があるが、実験の打ち上げは、教官と学生との親密さを生む一役を買っていると思う。

親密さというと、実験はやはりそれなりに苦労することもあって、同じ苦労をいっしょに味わった仲間意識が生まれることもあるだろう。実験を失敗してやり直したり、レポートを作成するために下宿に集まって徹夜したりなどなど、今から考えるとなつかしいような思い出である。僕は根っから脳天気な人間らしく、「のどもと過ぎれば熱さを忘れる」ということわざにあるように、きつかったことなどすぐ忘れてしまう。わいわいがやがやとさわいでいた事ばかり覚えていて、実験もそれなりに面白かった

なぐらいのものである。

では、これらの実験で何を学んだのだろうか。試験管の洗い方やプレートの作り方だろうか。僕はもっと別のものだと思っている。それは実験に対する心構えや注意、そして何といても科学の基本的な思考法、考え方である。どのように組立ててゆくか、何を考えなくてはならないか、そして何を見落しているのか、である。科学的な物の見方、考え方を身をもって学んだと思うのである、と書いてしまうと、いかばかり過ぎているだろうか。僕はいまでも覚えているのだが、ある地学の教官が、次のようにおっしゃった。「新婚旅行なんかでハワイに行くとき、飛行機の窓から島を見たら、ああこれ有名な盾状火山かと思って欲しい。」とまあ、これは極端すぎるが、科学的な物を見る眼を常に働かせておいて欲しいという意図はよくわかる。これが科学的な物の見方というのだろう。

実験・実験というけれどいろいろなものがある。物理、化学、生物、地学。それぞれの分野でそれぞれの見方、考え方がある。物理や化学では実験室内で行うし、生物や地学では野外調査という事も行う。アプローチの仕方は異なるが、実験の基本的な思考法は同じである。いろいろな分野の実験を行ってきたためであろうか、ひとつの現象に対していろいろな角度からながめることができるようになってきている。その一例が大山研修であろう。これは大山を植生、地形、土壌、気象といった各分野から総合的に調査することを目的としている。

環境科学コースの生活という題目であったはずなのに、なぜか実験の感想のようになってしまった。というのは、これを書くにあたり、自分自身で環境科学コースの生活とは何かと問い直し、いかに実験というものが重要であるかを再認識したためである。実験を語らずして環境科学コースの生活は語れないだろうと思い、この際、実験というものを自己分析してみたい思いにかられたのである。もちろん実験以外の生活も多くあり、それが人それぞれであることは言うまでもない。

語学はお友だち

地域文化コース3年 野田 啓三

地域文化コースの生活なんて、どう見ても珍しいものではなく、誰が好き好んで興味を抱くか／＼と言いたくもなる。しかし、他のコースと比べて地域には女子学生がたくさんいる。ぱっ、と明りがつく思いである。それだけが取り柄じゃないの、と言われるとただ顔をひくつかせるだけであるが、敢えてそうじゃないんだぜ、ということを知ってもらうためにも地域文化コースの生活の実際を掲載したい。そこで、地域でも平凡に学生生活を過ごしているような人に登場してもらい、インタビューに応じてもらった。

●—それではまず自己紹介を…。

◎地域文化コース3年、アメリカ研究講座所属の野田です。テニスと野球のサークルに入っています。

—アメリカ研究ということは当然、英語はバリバリなわけですね。

◎そう言われると答に困るんですけど、いわゆるそうなるのが理想だということです。理想はそのまま理想で終わるのではなく、アメリカ研究にきたならば、当然英語がすべての面、speaking、reading、あるいはhearingなどで理解できるようにならなくてはならない。少なくとも英語の文献だけはきちんと読めなくてはならないわけです。卒論は英語で書くわけではないですが、授業ではほとんど英語と付き合うのです。だから、アメリカ研究なら英語、ヨーロッパ研究なら、ドイツ語やフランス語と学外の生活でも楽しく交際していかねばならない。少なからず、地域の学生の生活は語学に影響されていると言ってもいいでしょう。教職で英検2級なんかもあるべく必要だと言われてるし、外人教師とも飲みに行ったりするし…。

—英語の教職をとっているんですか？

◎はい。英語と社会をとっていますが、地域の人たちはだいたいの人がとっているんじゃないでしょうか。アメリカ研究の3、4年生を例にとると、16人中11人が英語又は、社会、国語の教職をとっています。全部が全部、教員になろうとしているわけではないようですが、地域文化コースを卒業された方々に教員が多いということを見るとなるほどどうなずけるということころでしょう。それに大学生活の中に教育実習の体験を組み込むこともいいんじゃないですか。金八先生、あるいは『めぞん一刻』の世界

に浸るのも一興というものです。こんなこと言うと先生方に怒られるかもしれませんが…。

—授業のコマ数はどの程度埋まりますか。

◎僕の場合、教職をとっている分、3年生になってもかなり詰まっています。でも、教職とってなくて、1、2年をけっこうまじめにやっていたら、3、4年になってかなり楽になるんじゃないですか。

—ということは、3、4年になると自由な時間がかかなりできるわけですね。

◎まあ、そうだね。その分、自分で勉強していかねばならないわけだけど…。環境、情報には実験、社文にはゼミがあって、3年のときからそれなりに鍛えられるわけです。しかし、それが地域にはない。だから、地域の場合、3年ぐらいから卒論に対する興味とか、姿勢とかが積極的になされなくちゃならない。アメリカ研究では、4月にはやばやと卒論のガイドラインを提示する発表会があるし、他の研究講座でも他コースと比べると早めに会を開いているようです。

—4年生になったら、地域の学生はどこへ行くのでしょうか。

◎まだ僕も3年なので、4年生の事情はよくわからないけど、理系の学生のように教官の研究室に在室することはないようです。特に文系の場合、週1回の卒論指導しかないという生徒が続出するので、その必要性がないのかもしれないですね。でも、一応、地域文化学生研究室というのがあって、そこが地域の学生の控室となっているのでしょう。いずれにせよ、文系学生はいずれこへ、というのは4年になっての問題になると思います。

—最後に地域の学生生活についての意見なり、感想をどうぞ。

◎地域文化コースの学生は女の子が多いからかもしれないけど、もっと積極的に学部行事に参加してほしいです。それに地域の学生のタテのつながりを重視して、地域会報なども作ってほしい。それから、自分の研究する地域に実際行ってみたいのです。

—どうもありがとうございました。

総科のバイオマンたち

編集部

総合科学部でもっとも人気のあるコースと言えば、情報行動科学コースであるというのが通説となっている。情報行動科学コースは総科の中でもバラエティにとんだコースであり、3つの群はそれぞれ、数理情報科学、生命科学、行動科学に分かれている。しかし、情報行動科学コース（以下情報コース）が3分野に分かれていようとも、学生生活は実験を中心に動いていると言ってもいいだろう。これは環境科学コースがそうであるように理系コースの宿命であるかもしれない、そこで、情報コースを代表して最近のバイオブームで注目されているⅡ群（生命科学）の学生にスポットをあててみた。

まずはじめに柱となる実験に関して、その生活へのかかわりあいなどはいかなるものであろうか。

「2年のときは基礎実験で、環境の学生とも一緒だけど、3年になるとⅡ群の学生だけで実験を行っています。その実験は、はじめの頃はけっこう長い時間やっていたのでしんどかったけど、もう慣れてしまって苦痛には感じなくなった。今では、反対に実験をすることでいかに大学生という雰囲気を楽しむことができることに感謝している。」

これはインタビューを通して感じたことだが、彼らの実験に対する情熱はすごく、実験について話している時の彼らは輝いて見えた。それに、時代の最先端を行っているという自信もうかがえた。



「授業は、他コースの学生と比べて詰まっているような気がする。2年次に選択必修の授業が少なく、どうしても3年次に選択必修をとらねばならないからだと思う。それに環境と比べて、教官数も少ないから、仕方ないことかもしれないが……。」

やはり理系の場合、実験で2コマ使うということで、文系と比べてコマ数が詰まることになるようだ。文系のように「3年後期授業2コマ」などというよ

うには絶対ならない。果たしてどちらがいいのかは皆さんの判断に任せたい。

次にちょっと学問的立場から観察してみたい。

「環境コースとの違いは彼らが植物を中心に扱うのに対して、僕たちは動物を中心として研究するという事です。理学部でも僕らと同じようなことをしているようですが…。彼らは知識的にすごいですよ。つまり、専門のことにに関して対応できる範囲が深いわけです。その点に関しては脱帽します。でも、総科には理学部にはない広がりがある。それは生物を中心に勉強しているが、化学との接点に触れることもできるということです。これは理学部にはない魅力ですね。」

なるほど、ただ単に大腸菌をついているだけではなかったのだ。彼らからバイオでの大腸菌の重要性について学んでしまった。大腸菌のことでいじめたことを反省せねばなるまい。

最後に情報Ⅱ群のたてのつながりと情報コース内としてのまとまりについて聞いてみた。

「2年のときは、はっきり言って自分が情報何群に所属しているのか自覚できなかった。でも、3年になって専門の実験をすることでⅡ群であることに目覚めた気がする。3年になると教官との接触の機会が増えるしね。でも、2年-3年のつながりがうすいのは残念だ。今年から年1回ハイキングなどを催し、たてのつながりを深めようとしています。だからもっと学生側から教官とのコミュニケーションを積極的に行うべきでしょう。生命科学セミナーなど、その機会は少なくないのだから…。」

情報コースとしてのまとまりはあるような気がある。新歓コンパぐらいしか一緒に集まる時はないしね。学生が学年ごとだけど結束すると言えば、なんと言ってもソフトボール大会ですね。今年もきっと盛り上がるでしょう。」

情報Ⅱ群としてのまとまりは今ひとつだが、筆者から見た場合、けっこうまとまっているような気がするのだが…。情報Ⅱ群の結束と比べるとやっぱりかと思うけど、実験で培ったつながりは文系とまた違った趣きを感じさせてくれる。実験もそうであるが、彼らの専門に対する意気込みは彼らの生活の中ににじみでているのだと感じた。

（文責 野田 啓三）

2) 強者どもは『夢の途中』

若者の体力低下が取りざたされている昨今、教職員の方々のスポーツに対する熱心さには脱帽、思わずロマンをも感じてしまいそうです。そこで、大学生活の一環として、自分のやっておられるスポーツについて語っていただきました。

テニスと私

社会文化研究教授 山田 浩

「テニスと私」という題の文章の依頼をうけた。私のテニスもいささか知られるようになったかというのが、ひきうけた瞬間の感慨だった。若い頃はまったくスポーツに縁がなく、運動部特有の雰囲気むしろ白眼視していた方だろう。それがテニスをはじめて、もう足掛け6年になる。コートでは多少古顔の一人で、そうなるには私には私なりの理由があった。

高血圧が引き金

40才過ぎから身体の衰えを何とかと思ってきたが、50才はじめに思いがけない事態に直面した。持病の高血圧が悪化し、倒れるまではゆかなかつたが、しばらく休むことを余儀なくされた。その後もすっきりせず、医者が煙草をやめよというので、泣きの涙でやめた。だが、世の中は単純でなく、今度は禁煙のため食欲がでて、肥満が悩みの種になった。高血圧のほかにも、痛風と軽い糖尿病があり、医者もよそ事なので景気よく運動をすすめる。そこで「よし」と覚悟を決めたわけで、私の場合高血圧がテニスの引き金となった。

スポーツは痛風や糖尿病には文句なくいいのだが、高血圧にはきつい運動は禁物だ。そこどころは心得ており、年齢のせいもあってあまり長くはやらない。約1時間ぐらいで、そのかわり可能ならば毎日やる。それにしても、2年ほど前鹿児島大学にいるテニスの好きな友人のH君が、プレイ中脳梗塞で倒れた事件はショックだった。今も半身不随と言語障害に苦しんでおり、その轍をふまないよう心している。

しばしば追い越された

テニスをはじめた頃は、打った球が何処にゆくやら分らず、相手にも迷惑をかけるばかりで、面白くも可笑しくもなかった。ただ夏場などは、走り回るだけで多量の汗をかき、塩分が抜けるせいか身体の調子もよく、それで一種の薬と考えて練習に精出した。

しかし、その間情けない思いをしたこともしばしば

で、その一つに後からはじめた人たちに容易に追い抜かれたことがある。この点、ドイツ語のTさん、中国語のMさん（現在一橋大学）の場合が典型的だろう。最初はまことに遠慮深くコートに立たれていたが、若さと熱心さでたちまち私を追い越し、めざましい上達ぶりを示された。あれやこれやで、私にも下手なもの、取り残されたものの悲哀はよく分るつもりだ。

それとも、長い間やってきたお蔭で、ここ1年間かなりの進歩がみられ、テニスの楽しさも理解できるようになった。テレビのテニス番組も面白く、今年の全米オープンに優勝したハナ・マンドリコワやイワン・レンドルとか、有名選手の名前も耳に親しいものとなった。ゼミ学生の卒業プレゼントにも、テニス用品がえらばれ、2、3年まえにはシャツを貰ったし、今年は帽子の予定である。東京でサラリーマンの息子の還暦記念もラケットで、目下は親子二人連れでテニスをやっているようなものだ。

やっぱり自己流でゆく

ある程度うまくはなったが、まったくの自己流で、このままではこれ以上の進歩は到底望めない。そうした悩みのなかで、たまたま故中野好夫氏の論評集『人は獣に及ばず』を読んだ。中野氏の文章は歯切れがよく、リズムがあって好きだが、そのなかに「ゴルフは罪ありや」という題のエッセイがある。氏のゴルフ自戒が述べられており、その一つに「上達のために投資はしない。ヘボ・ゴルフで結構」というのがある。わが意をえたり的心境になったが、一方多少の欲もでてきており、さてどうしたものかとしばしば思案の時期があった。

そんな気持ちでいた今年の夏休みの終わり頃、前出のMさんが広大に集中講義にこられ、一緒にテニスをする機会があった。集中講義でも、ラケットははじめ用具一式を持参されるところにMさんの熱心さが窺われ、また東京ではプロ・コーチについたとの噂だったので、いろいろ聞いてみた。印象に残ったのは、年がいかに若くとも、明らかに自分より上の者



のいうことには、自分は忠実に従う方だという言葉だ。ここにMさんの人柄がにじみでており、心の底から感服した。

テニスと私

昨今のテニスブームの原因として、格好の良さを挙げるのは、推理能力に貧しいというべきであろう。時間に追われる職業人には、他に適切な運動が見つからぬのである。ジョギングは、単調過ぎて毎日続けるには余程の意志が必要だ。ソフトも野球も人数が集まらねば面白くない。第一、偶にならともかく、よい年をして毎日棒を振り回すのも気が引ける。武道は儀礼が厳しく、好きな時にやるという訳にはいかぬ。ゴルフは時間がかかり過ぎる、等々といった具合で、遂に職業人のスポーツは、テニスという終着駅にたどり着く訳である。

かく言う小生は、中学生の頃まで柔道（オヤジの関係で）、高校は軟式テニス、大学は弓道、大学院から若手研究者の頃にかけてソフトボールと遍歴した。30代半ば、時間に追われる日々の中で運動不足から胃腸の調子を崩した自分に気がついたのであるが、丁度その頃、硬式テニスの試合の放映をテレビで見た。それはオーストラリアのニューカム選手と米国のコナーズ選手の2時間に及ぶ死闘だった。これを見て硬式テニスは、女子の羽衣板の類からこういう死闘にまで至る巾の広い楽しみ方のできる競技という印象を持った。もう一つ興味深かったのは、軟式テニスほど、体力消耗が烈しく無いということであった。軟式では、身体全体で振り回すから、30分も試合をすると相当体力を消耗する。

さっそく、天文の内海さんをさそって、軟庭部の

だからといって、Mさんにならおうと決めたわけではない。プレイをみていると確かにうまいし、筋はいいようだ。この点は何度も強調しておきたい。しかし、特別に驚嘆するほどのものでもない。プロ・コーチについてあの程度なら、こちらは年も年だし、まあやめておこうと、再び中野方式に帰ることにした。

これが私の最大の欠点で、囲碁の場合でもそうだ。かなり前中国語のHさんに惨敗して、それを契機に少し心を入れかえて勉強しようと、家内に新聞囲碁欄の切り抜きを命じた。最初は碁盤をもちだして並べていたが、三日坊主に終わった。今はただ切り抜きがたまるばかりで、またもや家内に批判の絶好の材料を提供しているというていたらくだ。

基礎科学研究教授 松田 正典

学生にコートを一面譲ってもらい、練習を始めた。案の定、1～2時間の練習後の疲労感は大変心持良いものだった。一風呂浴びた後の壮快感に等しく、これなら練習後の仕事にも支障がない。加えて球の音色がなんとも良い。1ヶ月で胃腸の調子を取戻した。

その内、練習に水島さん（地域研究）が加われ更に体育の荒井さんと、荒井さんの下でコンピューターのアルバイトをしていた理学部院生の白石君も参加し、練習は一段と楽しくなった。白石君と私は、度々シングルスで死闘を行った。白石君の今の奥さん（勿論、当時は独身）が、プレハブの2階の窓から見ていたとは、私は知らなかった。白石君の眼の色と勝敗へのこだわりは、想像におまかせする。私が合点したのは後の事であった。

今の私からは誰も想像できぬと思われるので、敢えて自慢をするけれども、この頃の小生は軟庭からの技術的移行が成功し、ストロークが身についていた。水島さんが前衛で私が後衛だと、セミプロの荒井さんのボレー攻撃をパッシングショットで打ち抜き、大体は我が邦が押し気味であった。

今日の我が学部のプレーヤーは、皆さん当時の我々よりもボレー攻撃において、格段上手である。しかし、当時のレベルをそのまま維持しておられる荒井さんには、皆さん少々分が悪い。これはいささか矛盾している。多分、セミプロ級のボレー攻撃にボ

レーで対抗するのは至難であり、むしろコントロールの良いパッシングショットの方が対抗し得るのだと思われる。

交通事故で半年間中断止むなきに到った私は、以来8年間、思い通りに動かぬ身を持って余し乍ら、あれこれ非力をカバーする技術を考えて来た。その一、脚力が弱ると歩巾を大きくとって身構えたくなるが、これは逆効果。歩巾を小さく構え、球に向かって踏み込む方が腰の位置が低くなる。その二、腕力と背筋力が弱った時のサーブのコツ。上半身のみを抜き、打つ前に膝を曲げ一度腰を沈めてその反動で球をとらえる。その三、ロブは手で上げるに非ず、ロブの失敗の確率は脚力の弱まりに比例する。その四、一番肘に負担がかかるのはコンチネンタルグリップ(I)、次いで人差指を伸ばしたイングリッシュグリップ

(II)、最も負担が少ないのは、人差指を伸ばさない握りしめ型のイングリッシュグリップ(III)。私は(II)で打っていた。これはスナップが効いて球が伸びるので、ボレーでも合わせ難いし、深い球は足許に決まって威力がある。しかし、握力が落ちると肘を傷め易い。事故後、さっそく肘痛になり、人の勧めで(I)に変えたらダメージが一層ひどくなった。肘には(III)が良いというのが結論である。目下、肘に負担の無いバックハンドの両手打ちへの取組みを楽しんでいる。

(III)のグリップは、未だ身につけていない。これが身についた時が、私の復活の時だなどと、年甲斐も無く胸をときめかすこの頃である。しかし、集中力の回復の決め手は何か、これは難問だ。

テニスとは碁打ちと見たり、その心は共に考える。

勝った！学内バレーボール大会

総科職員バレー部

ある日突然、飛翔編集委員から「バレーボールに関連して何でもいいから原稿をお願いします」と言われてしまった。びっくりして一度は丁重にお断わり申し上げたが、これは聞き入れられなかった。

以来1ヶ月余り頭を悩ませた結果、毎年夏8月に広島大学レクリエーション委員会の行事として開催される教職員のバレーボール大会のことを書くことにした。

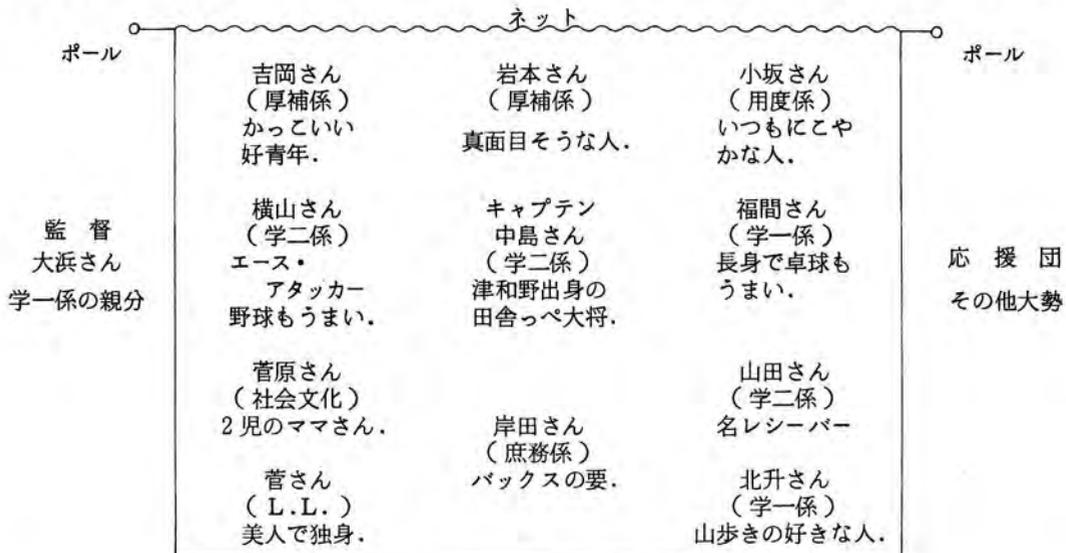
この大会は、2日間にわたって本部事務局、各学部から23チームが参加してトーナメント方式で行われる9人制のバレー大会で、優勝するためには5試

合勝たねばならない。

過去この大会で総合科学部は2連覇しているので、今年も優勝というプレッシャーのかかるなかで、まずメンバー構成にとりかかった。いろいろな議論の末、以下のようにメンバー(ポジション)が決った。

メンバーが決まれば、優勝目指して練習あるのみ。試合2週間前から毎日昼休みを練習時間にあて、さらに、夕方5時過ぎからの夜間練習計3回をスケジュールに組み込むという熱の入れようであった。

いよいよ大会当日。第1試合附属学校部との試合は、フルセットという苦戦の末、勝つことができた。



第2試合文学部戦（相手が全員女性だったので、少しとまどってしまった。）、第3試合歯学部附属病院戦、第4試合理学部戦、いずれもストレート勝ち。第5試合決勝戦は強敵経理部との対戦。これに勝てば、優勝、3連覇達成だ。試合は予想どおり1セットずつ取り合って、勝負は3セット目。15対17と劣勢ではあったが、応援団の大声援のなかで総科が5連続サービスポイントを決めマッチポイント。最後はあっけなく向こうのパスミスで優勝決定。しんどい試合ではあったが、メンバー全員の団結と応援に

よって3連覇。恒例の監督胴上げは、監督の体重を考慮して急拠取りやめ。（監督さんごめんさい。）優勝の余韻を楽しんだあとは、もうこれしかない。待ちに待った“打上げ”。ビールのかけあいをやろうかと思ったが、もったいないので優勝カップでメンバー1人1人がビールの一気飲み。あとは来年の優勝を目指しバンザイをして、この夏のバレーボール大会は賑やかに幕を閉じた。

（文責 岩本 正夫）

野球談議に花咲いて

— 生和先生インタビュー —

編集部

我々、飛翔の新米編集委員は先輩編集委員の指命を受け、9月30日の午後、総合科学部の2階へ取材に行ったのである。今日お訪ねした先生は、心理学の生和先生。先生は、学内の草野球チーム“カスパーズ”で活躍しておられる。以下は生和先生との野球談義の実況記録である。

飛翔（以下飛と省略）「今日は先生の所属しておられる、カスパーズのことを含めて、野球についてお聞きしたいのですが、まずカスパーズのできたきっかけとメンバーの構成などをお聞きしたいんですが。」

生和先生（以下敬称略）「え〜と、僕が総合科学部に着任したのが、54年だったけど、その前まで総科の情報と環境の間で“情環戦”と称する野球の試合をしてたわけなんだよね。その頃から、学部のソフトボール大会じゃ物足りない連中がいて、たまたま僕も野球が大好きだし、それじゃチームを作ろうかってことになったんだよね。」

飛「じゃあ、メンバーは情報、環境の方たちですね。それで人数はどのくらいでしょうか。」

生和「うん、だいたいそうだけど、わくは作ってないよ。他の学部の学生も入ってるしね。人数は、だいたい20人くらいで、紅白戦ができるくらいはいます。」

飛「先生のポジションは、どこを守っておられるんですか。」

生和「昔はピッチャーだけど、今はほとんど出してもらえない。（笑）」

飛「では監督専任ということですね。」

生和一「ええ、あとキャッチャーの補欠とね。なにしろ人数が少ないから。（笑）」

飛「ということは、いつでも穴があいた時には、お入りになれる、ということですね。」

生和一「走らなくていいところならね。（笑）」

飛「ところで、先生の過去の野球の御経緯は、どのような？」

生和一「高校の時まで、軟式野球をやっていました。」

飛「やっぱりピッチャーですか。」

生和一「うん。だけど球は遅いし、カーブは曲がらなかったよ。そうはいつでも軟式ってあまり点が入らないからね。（笑）」

飛「今の高校野球をどう思われますか。」

生和一「少し目先の勝利にこだわりすぎるきらいがあるね。高校野球に限らず、小・中学校の時から変則投手が増えてきていることからわかるし、本当に速いストレートで勝負してくるピッチャーがいない。まあ、彼らも、自分たちがベストを尽くしたらそれでいい、という状況でなくなっているからしかたのないことかもしれないけれど、なんか、間違っている気がする。」

飛「応援団というか、母校の名誉だとかが、からんでくるわけですね。」

生和一「そうだね、やってる方はベストを尽くして『ああ、良かった。』と思ったって、後で実際にやってない人たちは、そうはいかないんだからね。」

飛「え〜と、プロ野球はどちらのファンですか。」

生和一「僕はタイガースです。」

飛「どういう理由で、阪神ファンになられた訳で

すか。

生和一「僕の田舎は鳥取の米子なんだけど、当時のタイガースのキャッチャーで、土井垣という選手と、ショートで長谷川という選手がいたんだけど、彼らが米子出身だったわけ。それで、よく巡業という形で出ていたんだよね。」

飛一「では今年あたりは気分良くテレビも御覧になれるのではないですか。」

生和一「だけどまだ安心できないっていうのが本当の所だね。長年に渡って裏切られ続けてるから、阪神ファンは。(笑)まだ吉田監督の胴上げを見るまでは喜べない。」



飛一「今、大阪はものすごいタイガース・フィーバーだそうですが。」

生和一「あれは、どうかと思うね。彼らは野球をしたことのない人が大半なんじゃないの。だいたい本当に野球したことのある人だったら、緊迫した場面でストライクを取ることや、ヒットを打つことの難しさを分かってるはずだから、無責任なことはいえないはずだから。あのピッチャーが投げる前から『ウーッ』なんて声を出すなんて、野球やったことのある人には出せないんじゃないかな。」

飛一「そうですね。」

生和一「だから、ああやって応援している連中には実際にやられてみればいいんだよね。」

飛一「最後になりますが、先生にとっての野球の効用は何でしょうか。」

生和一「僕にとってだけじゃなくて、団体競技をするっていうのは必要だと思うね。例えば、学生なんか、レポートの提出が少しくらい遅れてもどうにかなるっていう所があるんだけど、野球は9回終わればそれで終わり。負けてるからもう1回ってわけに

は行かない。確かに意識してやってるわけではないんだろうけど、そういう所はあるだろうね。それに、同じチームでやってると教授も学生もないし、他の一般の社会人の人たちと試合してるうちに、学生たちなんかは、物おじしなくなってくるね。」

飛一「そういう効果もあるんですね。」

生和一「まあ、意識してやってるわけじゃないだろうけどね。とにかく何よりも体を動かすってことが一番大きいよ。最近はおとろえが目立つし。」

飛一「そうですね。」

生和一「腰が回らなくなってきたね。以前は外野の頭を越える打球でも伸びないもの。」

飛一「ではパワーよりテクニックですね。」

生和一「テクニックより気力だな。(笑)まあ、とにかく、40代には40代なりの野球、50代には50代の野球の楽しみ方があるだろうし、体の動くうちはずっとやりたいと思ってますよ。」

飛一「今日はどうも、お忙しい中ありがとうございました。」

取材をしてみて感じたのは、野球をこよなく愛しておられるということ。勝てばそれでいいというミーハーな現代の野球ファンとは一線を画しておられるというのを深く感じた。衰え始めたなどとおっしゃらずに、ますますの御活躍をお祈りして、この記事を終えたい。

(文責 小笠原 弘明)

3) クラブ・サークルに生きる人々

編集部

授業が終わるとすぐにクラブ・サークル活動……。こんな日々を送っている人が結構いるようです。夜遅くまで活動に時間を費やし、いつもそのことで頭の中がいっぱい、といった人たち。また「今日はひまだから顔でも出してみようか。」という人たち。クラブ・サークルの種類やその活動体質といったものはさまざまだし、クラブ・サークルに対する思い入れも人それぞれでしょう。でもこういったことは第三者には案外知られていないようです。そこで編集部では、クラブ・サークル、そして総科の同好会に入っている学生を通してその実態を探ってみました。

試合に向けて

情報行動科学コース3年 赤川 雅美

私は、体育会バドミントン部に所属する3年生です。

バドミントンについて少々説明しますと、これは、シャトルコック(通称ハネ)をラケットで打つ競技です。バドミントンを少しでもかじったことのある人ならわかると思いますが、見た目とは違い、相当な体力を必要とするハードな競技です。

私が、バドミントンを始めたのは高校1年の時で、一番楽そうなクラブとしてバドミントンを選んだわけですが、見た目とは正反対でした。

体育会のクラブですから、試合で勝つことを目的としており、日曜日と火曜日以外は毎日練習があります。試合前一週間は、1コマ目の前に朝練習もあります。また、春、夏、秋休みには、それぞれ約一週間の合宿があります。試合は、中四国レベルの大会が年に5回、県大会が3回あり、それに加えて、九州大学、岡山大学、山口大学との定期戦があります。その他クラブの行事としては、大学祭の店出し、新歓コンパ、追い出しコンパ、キャンプ等があります。これだけの行事が1年間にあり、ほとんど毎日のように練習があるわけですから、クラブに拘束される時間というのは、非常に大きくなります。遠征や合宿の度に、2~3万円の費用が必要で、その費用を捻出するために、練習のない日や長期休みにはアルバイトをしています。毎日の生活を考えると1コマから4コマまで講義で、夜は9時まで練習、練習のない日はバイトという感じで過ごしています。

試合は、休日だけ行われるのではなく、平日にも行われ、3日~5日間あるので、試合に出ると、講義を休まなければなりません。こんなことを書くと「学校へクラブをしに来ているのか」と言われそうですが、毎日毎日試合を目標に、きつい練習をして

いるのに試合に出られないというのは、とてもむなしいことなのです。かと言って講義にも出たいし、試合の時は、いつも体が2つあればいいのにとか、クラブの活動を認めてくれるような状況があればと思います。

最近では、幹部という役目もあと少しで終わることだし引き際を考えなければ、と思っていますが、まだまだ不完全燃焼の感があり、来春の中四大会までは、頑張るつもりです。勉強の方も決しておろそかにできませんが、どうも、勉強よりもクラブを優先的に考えてしまいます。

最近では、大学に入ってまで苦しい練習のある体育会のクラブに入るよりは、同好会にでも入って楽しく遊びたいという人が多く、体育会の部に入部する人が少なくなっています。確かに、「どうしてこんなしんどいことをせんといけんのやろ」と思わないこともないですが、普通に単位をとってすんなり卒業して行くだけでは得られないものを、クラブをすることで得ることができるのではないかと思いつつ(それが何であるかはわかりませんが)、次の大会に向けて日々練習に励んでいる次第です。

文化系サークルもあるぜよ

編集 部

文化サークルとは？

体育系の次は文化系である。現在、広大には文化サークル連合、文化サークル団体連合、二部サークル連合といった、団体に属する公認サークルが多数存在する。(未公認については把握不可能)そしてなんと言われようと、体育系との大きな違いは程度の差こそあれ、自由意志を極力尊重するという点ではないか。まあ学生は大学においては“お客様”でなく“主体”でなければならない、ということは一応コンセンサスはとれている筈だ。つまり、この違いから、それを実現してくれるひとつの場が文化系サークルである、といえるのではないか。ま、少なくとも共通の楽しみをもった者が顔をつきあわす、いわゆる“溜る”場という部分があるのは間違いない。

われらが総科生はどれくらい……

さてサークルに居ると、とかく他学部生(特に工学部、生物生産学部生)が総科生の学生研究室の多さをうらやましがるのを聞く。また本学の他学部の人からも聞く。「溜まり場の必要」がわりと満たされているらしいこの総科生が、同じく「溜まり場の必要」を満たすサークル(この場合、文化系とは限らんが)に一体どれ程かかわっているのか。ここで文化系サークル団体の1つ、文団連の資料をみて欲しい。

あくまで文団連のみについての数字なので、その絶対値より他学部との比較でみてもらいたい。そこ

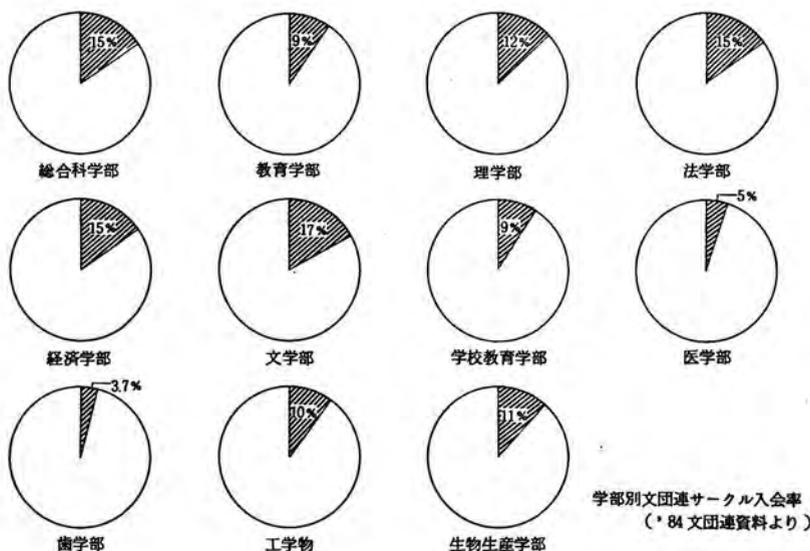
でみると、総科生は少ないどころか、むしろ多い方の部類に入る。これは一寸意外であった。ただこれが何を物語るのか今のところわからないため、論評は控え資料呈示にとどめたい。ただ、こと総科生に関して言えば、「文化系サークルに入っている人はそっちにのめりこみ、入っていない人は学科が中心になる傾向があるんじゃないか。」という様なことをよく耳にする。

入っている人も、入っていない人も……

このことは、どちらがよくて、どちらが悪いということではなく、1人1人が充実した大学生活を送り、広い視野が養えればそれでいいことだ。まあ入っている人も、そうでない人も、自己弁護も含めてそれなりにポリシーは持っていると思う。しかし、これは典型的“入っている人”である筆者の私見だが、特に文化系サークルの場合、先程挙げた様に“自由意志”のもとで、活動から運営まで全て自分たちの“手づくり”でやっていかねばならない、という点でメリットは十分あるし、この点は大学生活の中で見逃せないのではないか。

※注：音楽協議会についてはシステムが他の文化系と違い、扱いに困ったので今回は言及をさけた。ただ紹介しておく、会長に学長が就き、東雲から本学、福山にまで広がる14サークルで構成されている。会員制。

(文責 吉田雄一郎)



総科倶楽部見聞録

編集部

現在、総科には卓球、バドミントン、マイコン、サッカーと4つのクラブがあるが、活動中のところへお邪魔して彼らにインタビューを試みるようになった。果たしてどうなることか。なお、インタビューへの応答者はしばしば複数である。C1、C2のように区別をしている。

卓球愛好会(体育館1階)

— 創立はいつ頃？

C1 : よう知らん。そう古いことはない。

— 部員はどの位いるんですか？

C1 : 幽霊部員みたいなものが多いけん、わからん。やっとなる途中で顔出していつの間にか消えるのもおもしろね。

C2 : そ、何も制約がない。会員じゃない人がはいてきてもわからん(笑)。

C3 : とにかく、ピンポンを通して遊ぼうという、それだけ(笑)。

C1 : そ、だからね。卓球愛好会という名前やけどね。卓球と言う言葉、みんな嫌う。ピンポン愛好会(笑)。

— あとは雑談一直線。とにかく異様に明るかった。

バドミントン愛好会

— 時間は？

C1 : 水曜の4コマと土曜の1時から3時まで。(注これは卓球、バド、マイコン共通。但し土曜に活動しているのは実質こだけ。)

— 人数は？

C1 : 今50人位。一番向こうのコートで今やってるのが初心者。出て来るのは30人位かな。

— 真面目にやってますね。

C1 : そうでもないよ。普通前半の1時間が2人組で基礎練習。後半は今みたいに試合ばかり。あ、入りたかったら紙に学部と名前と…。

— 学部？総科だけじゃないんですか？

C1 : そう。総科は半分もいないぐらい。

— 聞き遅れたけど、できたのは？

C1 : 2年前位。学生課に登録したのは今年だけど。

— 何か困ったことは？

C1 : 一般開放の時間使ってるから、コートを他団体に取られることがある程度。

楽しい試合の出来る同好会を目指すとのこと。

一本筋の通った姿が印象的でした。

マイコンクラブ

— 人数とか創立とかはどの位ですか？

C1 : いつも出て来るのが8人位。コンパ要員が2人程(笑)。できたのは4年ぐらい前。

— 活動内容は？

C1 : 色々(笑)。去年の前期はやる人がなくて解散状態だったから、伝統も何もなかった。だからほら、ゲームやってる奴もいるし、コンパだけの奴だっているし。一応クラブの名前はあるけど、やりたい人が来てやればいいという方針。とりえず皆をつなぎとめるものとしてマイコンクラブがある。昔はマイコン自作している位だからマジにやってたかも知れないけど。

— はあ…

C1 : クラブに強制力があるって、嫌なんだよ。同好会よりも強制の弱いものを目指してる。普通なら先輩後輩の序列が厳しいけど、ここはないでしょ。ここだけに限らず、総科のクラブはどれも全部そうだと思うよ。多様な見方があっていいという考え方よね。

サッカー同好会

— 部員数は？

C1 : 男ばかりで15人。女の子は0人。

— 普段は見かけないけど、どこでいつ頃から練習してるんですか？

C1 : 練習そのものは冬近くにならないとない。去年は毎週木・土曜日、朝7時半から南グラウンドでやってた。今年はまだ決まってない。

— 試合などはどうなってるんですか？

C1 : 11月祭に定期戦をやってる(去年は教育学部の体育に3-2で敗れたそうです)。あとは1月のフェニックスサッカーね。2年連続ベスト8。

— 困っていることは？

C1 : 「試合直前まで人が集まらない。」これに尽きます。

— PR、その他なんでもどうぞ。

C1 : 自慢だけど、西ドイツナショナルチームそっくりのユニホーム、不真面目な練習でも結構強いこの不思議なチームへ、君も入りんさい！

(文責 青山 幸樹)

4) 学生研究室百科

研究室レポート(1年)「ここにすれば幸福になれる」

編集 部

『今、夜の7時を回っています。なぜ60生がいないのか!!昔はよくここで野球をやったものです。がんばれ、60生!!』『丘の上での6年間の花の女子校生活を終え、共学に入学した私は、ひどい適応障害をおこして登校拒否してしまうのではないかと懸念しておりましたが…』『今なかなかごやかな雰囲気でおしゃべりが進んでいます。ホストの話が出ていますが、みんな鏡が必要です。』(総科60ノート No.1より)

総科自然科学棟半地下、11号教室隣り。コの字型に並べられた机に寄り添う長椅子と、ほとんど、ある人専用のひじかけ椅子が3つ、4つ。壁に張りつくロッカーと、何ヶ月も前の貼紙。黒板には、先輩からのバイト紹介、落とし物の提示、友達募集の文字、文字。人口は常に1人以上、昼食時の人口密度はすさまじいが、試験期にはグッと減る。猫やゴキブリの乱入にもめげず、男女和気あいあいのなごやかムード。いきなり「どうしよう!」「おなか空いたぁ」などと叫びながら登場する女の子、おもむろにロッカーを開け、荷物だけ取り出して去って行く男の子。バイトの話、昨夜のミッドナイト・トークキングの続き、試験の情報交換、教官のウワサ話、恋のかけひき。高校の休憩時間の教室とは、少し違うけれど、下宿生活と講義との間で触れ合いを求めて60生が集う、なぜかフлариと寄ってみたいなる、そこが学生研究室である。

『みなさん、昨日はいかがでしたか?私は1次会で帰ったのですが、あれだけ騒いだの、久し振り。』『みーんな悩んでたくさん悩んで総科に入ってひと月半。いろんなことがわかっていまちよーどごたごたのとき。五月病にならないようにのりきろう!』『何か今すぐおちこんでいます。別になんでと聞かれても答えられんのやけど、これを五月病というのでしょうか。総科は楽しいけど、むずかしい。うまく言えんけど…。』『6月祭までは、またハードになりそうで不安ですが、体だけは丈夫なのでますます張り切っちゃって、ひんしゅくを買ってしまいうそです。』(No.4より)

4月のチューター別コンパ、自己紹介冊子の作成、5月の新歓、西条研修、6月祭の運営と打ち上げな

ど、総科60のほとんどの行事はこの研究室を中心に展開した。中でも、お好み焼き、ドーナツ、ゼリーの3品で10万近い収入を上げた6月祭は圧巻だった。ほとんど全員が仕込み、装飾、店頭販売などに協力し、打ち上げも学生研究室で行われたのである。

しかし、本当にこの研究室が、60生の「憩いの場」として活用されているのか、と問われると、即答できないのはどうしてだろう。確かに、空きコマや休憩時間の度に研究室に顔を見せる60生は多いし、放課後も必ず何人かは居残って時間をつぶしている。しかし、そうやって研究室に愛着を感じ、大学構内での自分の居場所だと考えている人以上に、もしかすると研究室拒否症をおこしている60生もいるのではないだろうか。「顔見知りの人がいないと、とても入りこんでいけない雰囲気。」だとか、「バリアが出来ているようで、もうとても入っていけない。」という意見も少なからずある。内気で、対人関係のバランスを保つことが苦手な人にとって、現在の研究室の雰囲気は「入っていくと、自分1人が浮いてしまう。」と感じてしまうようなものなのかもしれない。

それでも、そういった60生に呼びかけたい。研究室は、決してある一定の60生達だけの溜り場ではないはずだ。限られた学生生活の中で、それぞれが各コースに分れてしまう前に、総科60生として研究室に顔を出してみよう。サークルで忙しい人、バイトで忙しい人、デートで忙しい人(いるのだ、これが)。 「ここに来なければ死んでしまう」とは言わないまでも、きっと「ここに来れば幸福になれる」何かが、研究室の空気にはある。例えば、彼のように。

『9月6日☀ 今日とはとても暑かったので久々に食ったB定はいまいちだった。しかし微積のレポートはきのう夜がんばったから、それなりに出来たのは何を隠そうきのう巨人が勝ったわけで $y = 2x^2$ とするとき $\frac{dy}{dx} = 4x$ となったのであしたは雨でしょう。でも月曜の心理のテストはとりあえず受けて、“可”が貰ったらもう一けたということを手を打っておこう。』(No.10より) ???

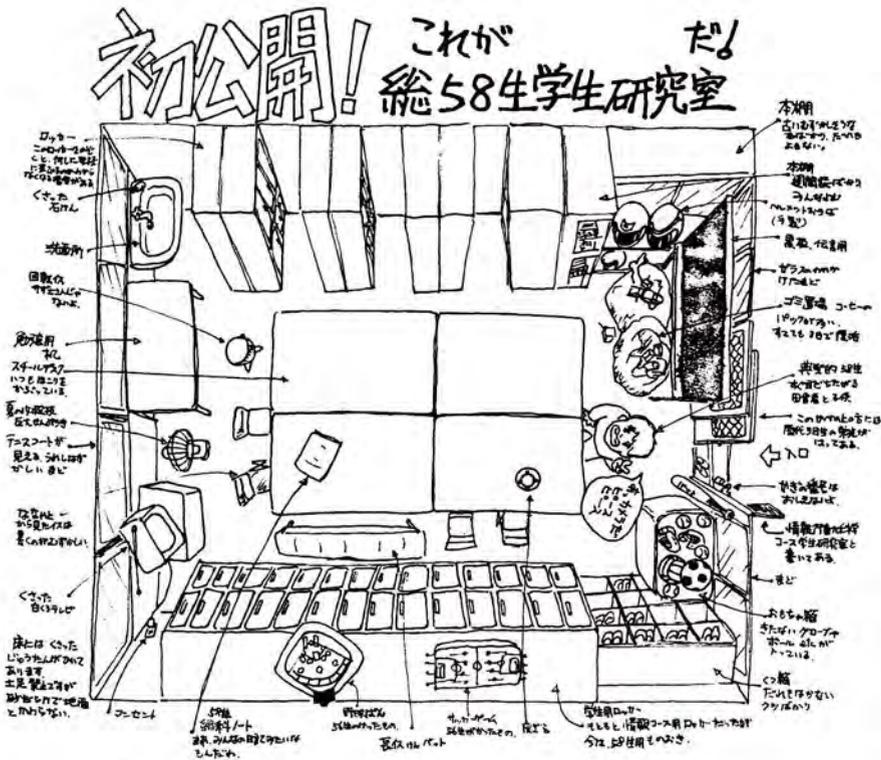
(文責 鈴木 美緒)

研究室レポート(3年) 「That's A Wonder Land」

編集部

自然科学棟半地下。その隅っこにあるのが総合科学部研究室だ。ここは1年次生に対して設けられており、自習・読書・昼食・談話等に自由に使用できる。またここには個別ロッカーも用意されていて、厚生補導係に申し出れば、1年間自分のロッカーとして使用できる。

2年次生になると、各コースごとに用意された学生研究室を紹介されるのであるが、実際にはこれとはちょっと違う利用のされ方をしている。テニスコート横のプレハブにある環境科学学生研究室、情報行動学生研究室は現在それぞれ「2年生の研究室」、「3年生の研究室」として利用されている。いつからこのようになったのかはわからないが、学生に関わる行事(春・秋のソフトボール大会・新歓、追い出しコンパetc.)の企画や運営において有効に機能しているようだ。こういった行事についての詳細は上記3つの研究室でたいてい知ることができるはずだ。



開けてびっくり玉手箱、ではないが総合58生の研究室は玉手箱としての価値は十分ある。58生個人個人でこの研究室に対する思い入れというのは違っているだろうが、敢えて言うならば、大学生活の憩いの場として研究室を考えているといったところであろう。なるほど、昼休みには多くの人が集まり、飯を食ったりしている。空きコマには次の授業の予習をしている。授業のない日でも研究室だけには顔を出すという人もいるので、それだけを見ても研究室に対する愛着というか、それなりの利用価値を認めていることになる。それじゃあ1年の研究室と一緒に言われるかもしれない。しかし、3年の研究室には学問の雰囲気立ちこめている(ホンマかいな)。そして、勉強の疲れをいやすようと56生が残してくれたサッカーゲームと野球盤がある。だめ押しに、研究室の前でキャッチボールをしたら先生方に怒られるという特典付きだ。そうなんだ、研究室は58生にとって憩いのワンダーランドなのだ。えっ、憩いのワンダーランドだって誰だ、そんなこと言っても悪さばかりすることもは?

(文責 海堀 修・野田 啓三)

5) アルバイト百花繚乱

編 集 部

金が欲しけりゃアルバイト、講義は出ずともアルバイト。というわけでお送りします、「実録 これ総科生のアルバイトだ!」

1 知的労働編

◦家庭教師、塾講師 —— 一般に、最も割がいいと言われ、人気のあるアルバイト。教育者として、知性と人格に自信のない人はやらない……訳がない。ちなみに「ぜひ総科生を」と指定してくる求人はいくつかない。よって足とコネで探すしかない。また、教える対象の年齢が低くなるにつれ、体力も要求されてくる。

◦ワープロ、コンピュータ打ち —— 最近では、VDT(ビデオ・ディスプレイ・ターミナル)に4時間以上向かっていると、視力及び身体に悪影響が出るとするのが通説です。

◦電気器具の組立て、取付け —— うーん、かっこいいけど、技術がないとちょっと無理ね。

2 肉体労働編

◦店員 —— おそらく最もありふれたアルバイト。種類もデパート、焼鳥屋、ケーキ屋、本屋、スーパーなど数多い。パブ、スタンドなど、夜のお店で働く者もいる。客でさえあれば、誰にでも「いらっしゃいませ」と「有難う御座居ました」、の雰囲気にならざるを得ないというものが、皆の一致する意見である。

◦催物の手伝い

その1 フラワーフェスティバル —— 何だかよくわからない広島祭りの手伝いである。配置場所によっては、アイドル歌手をじっくり拝めたり、1日中暇だったりする事もある。ただし、雨が降ると悲惨である。

その2 クイズ番組 —— 御存知〇〇〇〇クイズ。出て目立つ人と、地道に稼ぐ人、どっちが賢いでしょう。ま、人生設計の違いとでも申しますか。

その3 サーカス —— 「ほとんど暇で、サーカス只見して、日給もらって帰った(経験者談)」

その4 葬儀屋 —— 絶句。

その5 小学校の運動会 —— 行って何をするのか、僕にはよく解りません。

◦アンケート調査、ピラ配り —— ほらよく居るでしょ、本通りに「お願いしまーッす」って寄って来るのが。(ちなみに前期、情報Ⅲ群には、授業の一环としてのアンケート回収がそのままバイトになるという嘘のような話がありました。)

◦警備、運送、土方 —— これぞ肉体労働。夏は暑く冬寒い、ただひたすら根性と体力が要求される。

3 その他編

◦テレホンアシスタント —— 「通信業務に従事する者は、職務上知り得た通信の内容についての秘密を守らねばならない(憲法二十一条、郵便法九条)」

◦平和公園の噴水そうじ —— これぞ広島のバイト。一生活の種になります。「俺は若い頃、あの広島の平和公園の噴水掃除をした事があるんだぞ!」

◦ヤクルトおじさん —— 想像するだに不気味。

◦プール監視 —— 何も見ずに体をひたすら焼くタイプと、しつこく女性を眼で追うタイプの二つに分かれる。泳げない奴も多いという噂は本当らしい。

◦ゴミ集め —— 広島市のゴミ行政は日本一(のはず)です。

◦年賀状の仕分け —— 睡眠3時間という、労働基準法の盲点をたくみについた過酷な労働である。ただし、慣れれば惰性で手が動く。年賀状の郵便番号ははっきりと、よろしくお願いします。

◦披露宴の巫女さん役 —— やっぱり、おはらいしたり祝詞あげたりするんでしょうか?

以上全て総科生の経験してきたバイトです。要するに、えり好みしなけりゃいくらでもバイトはあるという事です。最近の学生は遊ぶ金欲しさにアルバイトしているという批判がよく聞かれますが、気にする事はありません。親の腰をかじって遊ぶより余程いいです。今日も元気で稼いで、元気に使おう。

(文責 田中 誠)

6) 「広島・ひろしま・ヒロシマ・Hiroshima」

編集 部

60生の約半数が、生まれ育った故郷を離れ、広島で暮すようになって半年になる。「広島」という言葉に、大学入学前には感じられた特別な響きはもはやなく、広島での生活が長くなるにつれ、「広島」で暮しているという意識は薄らいでゆく。毎日の生活を送るとき、ここが「広島」であることにさしたる意味はないのだ。「広島」であることを常に意識して暮している人が果しているものだろうか。

それでも、時折「ここは広島なのだ」と感じずにはいられないときがある。その思はすぐにまた日常生活の中に埋没してしまう程のものでしかないのだけれど。もしかしたらそれはいつも意識の隅に追いやられている「広島」という都市の自己主張なのかもしれない——たまには付き合ってやろうか。

1年生と3年生に聞いてみた。

「あなたは何を見て広島を感じますか」

まず、1年生、3年生ともに一番多かったものが「原爆ドーム」。広島＝原爆ドームというイメージが頭の中に出来上っているというわけか。確かにテレビや新聞などで広島が報じられる際（特にそれが被爆地としてのヒロシマであるとき）最も頻繁に見かけるのはあの原爆ドームだ。平和公園、鳩などを挙げた人も多い。原爆ドーム、平和公園、鳩の3つがひとまとめになって「広島」を象徴しているとも言えよう。次に多かったのが広島カープとそれに関するものだった。広島カープそのものから、カープファンそれに市民球場。中には「雨が降ってカープの試合がなくなり、巨一神戦をやっているとき」というのもあって、わかるようなわからないような。試合の度に一喜一憂する人たちはもちろんのこと、そうでない人でも周りを眺めて「広島だなあ」と感じるところがあるのでは。

数字的に見て多いと言えるのは以上の2つで、残りは様々にわかれている。その中で他のものよりやや多かったのが市内電車。広島だけにしかないというわけでもないのだが、ある程度の希少価値は持っているよう。（同じように市電の走っている都市から広大に來ているある女性は「町並みが似ていて時々錯覚を起こす」と言っていたが、そんなものかもしれない。）あと列挙してみると、もみじまんじゅう、

川、広島大学、広島駅、比治山、宮島、などなど。それから、「見て」というのとは違うが、広島弁を聞くとそう思うとか、夏の暑さに広島を感じるとかという人もあった。「自転車で息を切らして橋をのぼる時」なんていうのは誰でも一度くらい経験があるだろう。

話を聞いてみて感じたことだが、広島生まれの広島育ちの人は、「広島だなあ」と思うものが、ぱっと浮かんでこないようである。考え込んだ挙句に、「原爆ドーム」とぼつりと答えたりする人が結構多かった。「広島」に住んでるなあとしみじみ思うことなんて滅多にないから、他所の人がこれ見たら広島だと思うであろうものしか思いつかない。そんな言い方をした人もいた。それとは逆に、県外出身者はささいなものにも広島を感じるらしい。「オタクコース」に広島を感じる人もいる。

こうしてみると、例えば（ほんとにはほんの一例だが）「夏の暑い日、市電に乗って両側に原爆ドームと市民球場を見——この場合、市電は②番の広島駅一已斐、⑥番の広島駅一江波、あるいは広島駅一宮島口である——隣りではおちゃんが広島弁でカープの話をしてたり」したら、いやになる程、気分はもう広島を味わえるのではなからうか。ここまでくると、食傷しそうな気もするのだが。

「広島」に気づくとき、人には内からと外からの2つの視点があるだろう。広島で暮してみなければわからない「広島」と、他所からも見えている「広島」。いつもはすっかり忘れていたが、半年も暮せば内からの視点を持ち得るのだ。

「あなたは何を見て広島を感じますか」

（文責 藤本 貴子）

2. 三つの書評

『飛翔』が創刊してから数年の間、「三つの書評」というコーナーがあったのを憶えておいでの方もいらっしゃると思います。当時は三冊とも教官の方をお願いしていたのですが、今回は少々趣向を変えて、教官・事務・学生の中から一人ずつに書いて戴きました。それぞれに思い入れの深い一冊、あなたの本棚にもいかがでしょうか。

「誤訳」という名の本

社会文化研究講座教授 舟橋 喜恵

世に誤訳のない翻訳はありえないといわれる。風俗や習慣のちがう外国の言葉を完全な日本語に直すことは、しょせん無理なのだという人もいる。たしかにそういう意味では、避けられない誤訳もあるだろう。しかし避けられる誤訳もあるわけで、そういう誤訳は、読者の側からみれば、なくしてほしいし、訳者の側からみれば、慎重のうえにも慎重に翻訳作業をすすめるべきではないということだろう。

このごろは以前とくらべて誤訳をはっきり指摘する雰囲気が出てきて、そういう問題をあつかった本も何冊か出版されている。そして翻訳にかんする専門雑誌も『季刊 翻訳』がでて、それから月刊『翻訳の世界』が登場して、誤訳を批判するコーナーを常設した。ところが雑誌にしる単行本にしる槍玉にあがった訳者たちが、うけてたって反論するかというと、じつはそうでもないらしい。これはちょっと不思議な気がする。もちろん「やっつけ仕事」であったり、その外国語の文化的背景や宗教的背景についての知識が不足しすぎていたり、もっと根本的にその外国語の基本的知識が不足していたために生ずる誤訳ならば、反論できないだろう。そしてそういう翻訳が多いということもまた事実だろう。しかし他方、訳者たちが全面降服するのが当然とはいえない問題もあるのではないだろうか。翻訳が正確な読解力と同時に、それをうわまわる日本語の表現力を要求していることからみても、日本語についての見解の相違がからんでくることもあるからである。

おそらく誤訳をめぐる話題はいくらでもあるし、活字にならないエピソードめいたものは大学の就職を棒にふったというようなものまでふくめて、本当のところ数限りなくあるだろう。このごろは翻訳は

研究ではないという考え方がつよくなってきたし、ヨコのをタテにする翻訳は研究とは質のちがった作業だという認識も定着した。それでも優れた翻訳には語学力のほかに原著や原著者についてのすぐれた研究が先行しているのがふつうだから、欠陥の多い翻訳で就職を棒にふるくらいの影響力はこれからもあるだろう。とにかく公開の場で翻訳をめぐる議論がおこなわれるようになったのは悪いことではない。「誤訳の指摘……は手紙などでそっと知らせてくれるのが学者の仁義だ」という時代は過ぎさろうとしている。「……学者の仁義だ」とおっしゃった方の名前は、1982年4月29日号の『週刊文春』にでている。

こういう風潮に先鞭をつけた本で、わたくしにとってもっとも印象に残っているのは、竹内謙二著『誤訳——大学教授の頭の程』（高橋正雄編、有紀書房、1964年）である。世間ではおなじ題名で3年後の1967年に出版されたW. A. グロータース神父の本のほうがよく知られているだろうが、一步先んじたという点で、今回は竹内氏の本をとりあげよう。この本は経済学者による経済学の古典の邦訳批判で、第一篇でアダム・スミスの『国富論』、第二篇でリカードの『経済学および課税の原理』、そして第三篇は主としてイギリス経済学史の領域の誤訳がとりあげられた。『国富論』では竹内氏自身の訳、大内兵衛訳、その改訳版の大内・松川訳、さらに水田洋訳をならべて誤訳を指摘し、『経済学および課税の原理』でも竹内訳、小泉信三訳、堀経夫訳をならべて誤訳を指摘して、竹内訳が常に正しいのだと主張された。槍玉にあがった経済学者はこのほかに遊部久蔵、戸田正雄、河上肇、福田徳三、大河内一男その他そうそうたる連中で、彼らをまったく縦横無尽

に切りまくった本である。これは本当におもしろい本で、すすめられてよんだわたくしも笑いころげた。この本の再版が1982年潮文社からでたとき、編者の高橋正雄氏は「潮文社版によせて」のなかで、この本が「出た当時は、経済学会などの席で、みんなの報告・討論はウワノソラで、テーブルの下にこの本をかくして読んでいたということがささやかれた」とかかれており、これを裏づけるように標的にされた訳者の一人は「東京でこの本をうけとって読みはじめ、学会中も車中もおもしろくて、『巻をおくあわず』という状態であった。あう人ごとに一読をすすめたといってもいいすぎではない」とかかれたほどである。

批判された訳者のなかには竹内氏とごく親しい人たちもいたし、編者の高橋氏も批判された一人である。とにかくおもしろいから一読をおすすめする。おもしろいけれども内容はまじめで、全ページを使って「竹内訳をおいて正訳なし、正確無比とは自謙に非ず」とみずからおっしゃったわけだが、本当にそうかどうかは別として、とにかく古典の翻訳にはこれほどまでの執念と苦労があるのだということを、われわれに教えてくれる貴重な本である。

この本が1964年6月の初めに出版されてまもなく、

これに刺激されたエッセイがおなじ年の6月27日付の『図書新聞』（第763号）に掲載された。ドイツ文学者の野村純孝氏がマルクスの『資本論』の有名な文庫本邦訳を槍玉にあげたのである。これも辛らつなエッセイで、誤訳づくりに精をだす訳者と出版社の罰深さも指摘している。

さて、誤訳を指摘された側はどうしてもっと反論しないのだろうか。わたくしの記憶でもっとも堂々と反論したのは、グロータース神父の『誤訳』にくわえた永川玲二氏の反論である。永川氏は誤訳を指摘された御本人ではなかったが、『展望』1967年12月号に掲載された反論は神父自身が「猛烈に食いつかれた」と新版でかかれたように、きわめて積極的なものだった。こういう反論がもっともってきてもいいようにおもう。ただしグロータース神父は、新版のなかで永川氏の反論をみとめたうえで、さらに誤訳を指摘していることもつけくわえておくほうがいだろう。こうかいてくると翻訳という作業がどんなにしんどい仕事かしみじみと考えさせられるのである。

竹内謙二著『誤訳——大学教授の頭の程』（再版）
潮文社 1982年

『氷点』を讀んで

社会文化コース事務局 平本 貴子

四編から成る『氷点』は、クリスチャンである三浦綾子の伝道小説である。昭和39年、旭川の一雑貨店の主婦であった彼女が、朝日新聞社主催の千万懸賞小説にみごとに入選し一躍、作家として注目を浴びるようになったデビュー作なのである。それ以後、出版は約1年余りにして70万部を超え、マスコミの立体化とあいまって氷点ブームを作り出した。

「原罪」という一般的に難題なテーマを問うこの『氷点』に大衆がこのように共鳴する所以は、何であろうか。

まず、第一に青春時代、長い闘病生活を送り又最愛の人の死に会うという幾多の試練に会った著者が、そこから体験として掴んだものを訴えねばならぬという使命感に基づいて書かれているため。

第二に、道徳的に殺人というのは悪いことだといういかにも簡単なきっかけを始めとして、奥に「原罪」の意味を秘めながら、愛とは何か、人生とは、

友情とは……と我々が生きて行く上で必ず一度は悩まなければならない問題を取り扱っているから。

第三に、登場人物の複雑な人間関係を北海道の大自然の厳しさを折りまぜながら描いている。そして次々と偶然に起きてくる事件を契機として、はっきりと人間が神の方に向いて行く過程を見てとることができるから。

以上、三つの理由と共に著者の問う「何故こんなにも、だれしもが幸福になり得ないのか」と言う素朴な疑問に全ての人々がぶつかっているからではないかと思う。物質が氾濫し人間疎外が叫ばれている現代こそ一番考えねばいけない問題ではないのだろうか。

さて、この物語の主人公陽子が、自分是不貞な女から生れてきた事実を知り実の母を憎み、許すことができずずっと悩んでいた時、偶然、流水が燃えるというシーンに出会う。

(流水が／＼流水が燃える／＼人間の意表をつく自然の姿に、陽子は目を見はらずにはいられなかった。——中略——じっとそのゆらぐ焰をみつめる自分の心の中に、ふしぎな光が一筋、さし込むのを感じた——中略——あざやかな焰の色をみつめながら陽子は今こそ人間の真に許し得る神のある事を知った。)

『氷点』より

陽子が、神を心の中で意識するきっかけとなったものは何だろうか？

それは、人間の意表をつく自然なのである。大自然と人間を比べる陽子、そして自分はいかに小さな存在であるかを自覚する時、自然と神とはお互いに永遠不変のものとして同一視されるのである。「権威あるものが欲しい」と書き残して一度、自殺を凶った彼女であるが、まさしく権威あるものはこの大自然であり神なのではないだろうか。

著者は、偶然に目撃したこの流水が燃えるシーンをラストに用い、又、この場面を目撃しなければ、氷点の完成はあり得なかったと語っている。それだけに、この結末は『氷点・続氷点』のテーマを述べているように思われる。

そして、驚異的な大自然を目にした陽子は、「淋しい目から憂いを帯びたやさしい目と変っていった」と表現し、「自分がこの世で最も罪深いと感じた時、ふしぎな安らかさを与えられる」と語っているように、真に原罪(罪を罪と感じえないことが、最大の罪なのだ)を悟り、許すことができたところから再生が始まるということはこの結末で訴えたかったのではないだろうか。

この物語を読んで気付いたことは、著者は常にキリスト信者という観点に立って物事を見ているという事である。クリスチャンではない私には、価値感の相違を感じる所もあったが、一度死を決意した著者自身を、再び生きる力を見い出させ、そして他人のために祈ろうとする地点まで彼女を立ち直らせた不思議な力に魅了されているのである。

又、彼女の文学の母体である聖書を、少しずつではあるが読んでいく事がこの伝道小説の意義ではないかと思うのである。

三浦綾子著 『氷点』

朝日新聞社 1970年

「たんぼぼ主義者」のために

地域文化コース3年 向山 敦子

日々生きることの中で、人はなかなか死ねない。自分自身は死に直面したことのない私の周囲でも、祖母と友人が何人か死んだけれど、私は相変わらずここに居る。いつか私が死ぬ時には、また誰かが死ねないままに、彼自身の場所から、退場していく私を見送るのだろうか。

私はここに居る。例えば「どうして私はここに居るのか？」という問いでは、「居るのか」ということばの中に「居なければならぬのか」とか「居るしかないのか」というニュアンスが含まれる。誰かが私に、今この時、この場所に居なければならぬと命令してくれたのなら、安心してここに居られるのだ。しかし、ただ「居る」だけの私には「なぜ？」という問いを発することもできない。紙の上に打たれた点のようにぼつりと、ここに居る。

辻邦雄著『国境の白い山』という短編集は、果てしない戦いの物語である。ある時は黄禍論激しき頃のアメリカで、ある時はスペインの人民戦線とで舞台を移しながら、登場人物たちは「札束のために空

や風や木や花を愛せなくなった人たちを、もう一度、地上に引き戻してやる」ために戦う。それは現実においてほぼ実現不可能な戦いと思われるように物語の中でも、彼らは遂に勝利を得ることはできない。他人を搾り取ることで成り立つ社会に反発し、「金などに執着しないで、ただ煖炉で枯枝を燃やす火や、春の朝の訪れや、海の眺めや、ひっそりとした町の散歩を愛している人が、慎ましく、仕合わせに、静かに生きられる社会でなければいけない」と人民戦線に加わった若い植物学者は、藍いろの剥げた胴乱を残して砲弾に吹きとばされた。かつて名誉と金のために、自分の子を孕った女を殺した画家志望の青年は、全てを失った後にも、その罪の意識ゆえに愛する女を窮地から救えぬまま情死する運命となる。植物学者は相棒から、札束よりたんぼぼを愛する「たんぼぼ主義者」と呼ばれたけれど、たんぼぼは戦争のために花屋さえなくなった街で、葬いの棺の中に入れてやれる唯一の花でもあったのだ。

しかし、そんな絶望的な状況を描きながら、作者

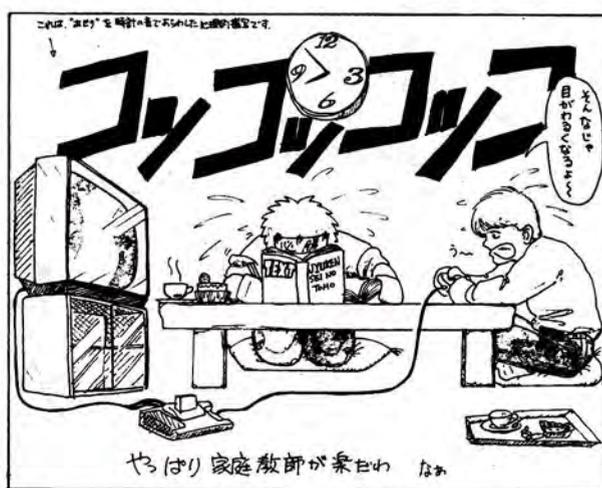
のまなざしはどこか明るく純粋なものへの信頼に満ちているように思われる。それは、人間性とよばれるものへの信頼というよりは、むしろ人間の存在への深い信頼であろう。人間は確かにたんぽぽと同じはかない存在だけれど、一本のたんぽぽが枯れてもまた次の花が咲いて、春の間中たんぽぽが咲き乱れるように、人間の一人一人もまた、その性質によってではなく、まさに存在することによって、同じ花を咲かせ続けているのではないか。人間は、その短い生の中で、ある者は愛する者を守るための戦いへの、またある者は『嵯峨野明月記』に見られるような美の完成への、個々の人間の内部にわき上ってくる明るく純粋な思いにつき動かされて、人間という花を咲かせ続ける。その根底にある、一人の人間が存在するという事実こそ、作者の深い信頼が置かれているのだ。そしてその信頼ゆえに、絶望的な状況のうちに物語が終わった後にも、私たちの現実において彼らの戦いが続けられているのではないか、そして私が生きている間ではないかもしれない

けれど、いつかその戦いでたんぽぽ主義者たちが最終的な勝利を得るのではないかという少々楽観的すぎる期待さえ持たされるのである。

辻邦生の、一人の人間が存在することへの信頼はまた、「私はここに居る」という人間の在り様への信頼でもあろう。誰に強制されたわけでも、自分で選んだわけでもなく、ただ「ここに居る」という事実だけが、どうしようもない現実として存在する。そして人間は死なない限り生きねばならない、ということも。そういう括弧つきの疑問や理由付けを拒む人間の在り様に、私たちはもっと目を向け、信頼を寄せてもよいのではないだろうか。人間性とかヒューマニティとか呼ばれるものを、しっかりと地上に結びつけるだけの力強さが、そこにはあるように思われる。

辻 邦生著 『国境の白い山』

中央公論社 1984年



学生相談室インタビュー

編集部

今回は学生相談室にマイクを向けてみた。ここには、岩村先生、徳田先生の二人の相談員に、荒木さんとおっしゃる受付の方の、計三人が専属でいらっしゃる。今回は相談員の1人でいらっしゃる徳田先生にいろいろ伺った。

—— こちらは、学生のための「よろず相談」の場ということですが、対象は総科生だけなのですか？

図 そうではなく全学的、つまりどこの学部の方でもかまわないわけで、実際いろんな学部の方から相談をうけますね。もちろん職員の方でもよろしいんです。



—— 学生相談室ができたのはいつごろですか？

図 もともとの設立は昭和37年、つまり総合科学部ができる前の教養部のころにできたのが、そのもとなわけです。ただし当時は、一般の教員が、当番制で相談役を担当していたようです。現在のような体制、つまり専任制になったのは10年前ぐらいから、そう総合科学部ができたと同様ぐらいからですね。

—— 1日にどれくらいの相談があるのですか？

図 時期によって違うんです。相談が多いピークがまず4～5月頃で、これは入学して間もない新入生が、授業や単位といった、主に勉学関係についてわからないことを相談してくる時期なんです。この時は多い場合、1日7～8人は来ますね。あともう1つ、1～2月にピークがあるんですが、これは主に、転学部、転学科の問題をかかえた人が来るんです。これは、その受付が2月上旬にある、ということに関係している様です。やはり、多い場合は1日つぶれる程、来室がありますね。まあもう1人いらっしゃる岩村先生と二人で分担してやっています。今頃はそんな多い時期でなく、内容は心理相談が多いですね。

—— 4～5月に多いとおっしゃいましたが“5月病”の人はいるのですか？

図 よくはわかりませんが、むかし言われていた程ははっきり出てこなくなったような気がしますね。今は、時期がおくれて、例えば夏休み明け等に出てくる、というケースもある様です。まだ、私は着任して何年といるわけではないので、比較が体験的にはできないのですが。

—— 一番多い相談は？

図 やはり、転学部、転学科問題ですね。その次ぐらいに、色々なものをひっくるめた心理的相談。3番目に新入生などの勉学関係の相談が多いですね。その他、就職、退学、休学、あと再受験などがありますね。

—— 日常の相談以外で何か特別なことはやっておられるのですか？

図 毎年の行事なんですが、3月上旬に“エンカウンターグループ”という合宿をやっています。これは、深刻ではないが対人関係に問題を感じているとか、生きがい、生き方について悩んでいるといった学生に対して、合宿でのグループの話し合い等を通して、自分を考え、深める機会を提供しようというものです。ただ参加する人がへってきてますね。今の学生は人の前で自分の考えを述べたりするのがイヤなのかな。

—— 総科生をどうごらんになりますか？

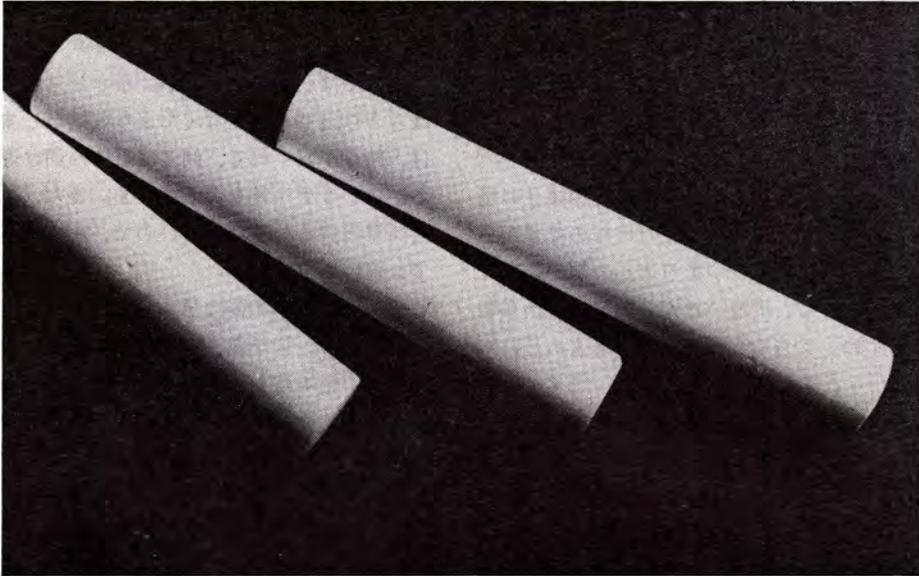
図 わりと総科生が来てないんですよ。しかも、知っているのはほんのひと握りの人達だから、ここで一般的にどうだとか言えませんね。ただ、進路変更などを考えると、全学的に学生が、小じんまりまとまっているというか、安全指向といえるんじゃないですか。大学に入ってくる段階で妥協があったりする場合が、とくに共通一次がはじまってから増えているようで、それが結局、進路変更という形で出る。みんなもっと冒険してもいいんじゃないですか。

—— 他にになにか？

図 とにかくもっと学生相談室を利用して下さい。別に気がねするような所ではないんです。気軽にドアをたたいてみて下さい。

—— ありがとうございます。

(文責 吉田雄一郎)



これで完成なのかな？と思う。— チョークと黒板が現在見られるようなものとなったのは、そんな最近のことではないはずだ。スタイルが長い間実質的に変わっていないということは、何ら問題のない、完成されたものだということを意味しているのだろうか。

チョークとは、我が身を黒板にこすりつけてできる粉によって文字を書く筆記具であるから、板書をすればその分の粉が生じてしまうのはあたり前。板書の多い先生が、手から袖口から真っ白にして授業をしているという光景も決して珍しくはない。最前列の席に着いていると、先生が板書を消すたびに空気がほこりっぽくなり、ひどくなると机の上に白い粉が降ってくる。些細なことかも知れないが、あまり気持ちの良いものではないことは確かだ。

「ホワイトボード」というのがある。総合科学部にも視聴覚教室に据え付けられているが、「白板」などと呼ばず、「ホワイトボード」と言うところが何となく面白い。これはチョークを使わず、専用のマーカーを用いるので例の“粉”にわずらわされることはない。そういった意味で、ホワイトボードとマーカーは黒板とチョークの欠点を補った新しい板書のスタイルだと言えよう。

ただ非常に私が残念に思うのは、「ホ・ウ・イ・ト・ボ・ー・ド」という点だ。話がますますセコくなるように申しわけないが、私にはどうもホワイトボードの板書は読みにくい。

黒板の板書とホワイトボードの板書は明暗部が逆、という関係にある。黒いバックに白い文字と白いバックに黒の文字。コントラストは同じであっても前者のほうが文字としては読みやすく目の疲れも少ないのではないだろうか。視聴覚教室の後ろの方に座れば、ホワイトボードに板書された青いマーカーの文字などは、背景の白がチラついて判読するのにもひと苦労だ。メモ代わりに小さなボードを部屋に掛けておく、というのとはちょっとわけが違うはずだ。

使いやすく、目の疲れにくい板書のスタイルを実現するのは案外難しいのかも知れない。昭和59年度に総合科学部に納品されたチョークは、本数にして12,960本(うち3分の2を白チョークが占める)。まだまだ主流だ。

(文責 海堀 修)

編 集 後 記

ベテランの水島、清水両先生が途中から海外へ渡航。どうなることかと心配したが、学生諸君の奮闘でどうやらここまでこぎつけた。もう一つ、胡椒の利かぬうらみはあるが。(広報委員 小野 寛晰)

私は〈大学のレジャーランド化〉などという意見は、〈おとなたち〉が、若者の牙をおそれてそれを隠すためいつの時代にも巧妙につくりあげてきた、デマゴギーの類のひとつだと、信じている。けれども、編集に参加しながら、ふと思った。もしかして、レジャーランドの案内書を作っているのではないのか?と(むろん例外あり)。妄想であればよいのだが……。(広報委員 古東 哲明)

かつて「広大新聞」、「広大医学部新聞」等を編集した経験から見ると、「飛翔」の編集は蝸牛の歩みのようだ。広告集めの苦勞がないのだから、学生さんにはそれこそ羽を生やして思い切り飛んでほしいもの。(広報委員 難波 紘二)

『飛翔』も今回の号とバックナンバーを積み重ねると厚さ4cm、重さ1.3kgのボリュームに達しました。

今後に望みたいことは、飛翔発行を一部の編集委員の手に委ねるばかりでなく、総合科学部構成員が積極的に利用することに気付くことです。

(厚生補導係 宮城 勝彦)

はたして、大学祭期間中の大学は、思索に適した環境でなければいけないのだろうか?

(吉田 雄一郎)

求雇主。当方、助っ人のプロフェッショナル。人手不足のサークル、団体は私のところまで。ただし優遇を望む。(田中 誠)

実働時間はいったいどのくらいだったのか……。ひたすら雑談にもえたインタビュー。自分の文字が活

字になるのはやはりはずかしいものです。みなさん、どうもありがとうございました。(青山 幸樹)

知らないことばかりでわけもわからず、約束、切ふちぎってどうもすみません。ご迷惑をおかけした方々におわび申し上げます!!(小笠原弘明)

原稿用紙に向ったのは入試の小論文以来のこと。大学入って初めてのレポートとも重なってしまい、ない知恵絞って、絞って……ひからびてしまいそうです。へっ、編集後記なんて、編集後記なんてえ!!(藤本 貴子)

希望に燃えて参加した編集のお仕事でしたが、わがままばかり言って多大な御迷惑を皆様におかけしたことを今深くお詫びいたします。女子大生満漫しましょう。総科のお姐さん!!(鈴木 美緒)

鳴物入りで我が家にやってきた仔猫の「ふう」。主人が夜中まで原稿書きに苦しんでいるのをよそにくうくう熟睡中です。お願いだから私の部屋にカメラキリを持って帰るのだけはやめておくれ。ある猫の飼い方の本によると、どこかからミンクの衿巻きを持って帰った(?)飼猫もいるそうですが……。(向山 敦子)

『飛翔』は総科の学部報。総科のみなさんが、「我々の『飛翔』」と言えるようなものにしたいと思っています。御意見をお寄せ下さい。『飛翔』にたずさわってはや2年半。もうちょっとやります。(海堀 修)

最近、編集と聞いたら、『飛翔』と映画の編集を思い出してゲッソリしてしまう僕でした。でも、すぐに次号の企画が襲ってくる…。(野田 啓三)

最後になりましたが、原稿をお寄せ下さった方々、ご協力ありがとうございました。

『飛翔』№29 編集委員

58年度生 海堀 修 野田 啓三 古川 哲史 向山 敦子

59年度生 田中 誠 吉田雄一郎 和田 秀次

60年度生 青山 幸樹 小笠原弘明 鈴木 美緒 藤本 貴子

なお、編集にあたっては、広報委員会の『飛翔』担当、水島裕雅、清水昭俊、小野寛晰、難波紘二、古東哲明の各教官、および事務官、宮城勝彦の方々の協力を得ました。